

「走り梅雨水聲町をつらぬける」水原秋桜子

水原秋桜子は明治二十五年、東京都生まれ。医師で俳人。高浜虚子に師事したが、後に「ホトトギス」から離れて「馬酔木」を主宰し、新興俳句運動をおこした。異国情緒豊かな長崎を好み、長崎に関する句を数多く詠んだ。『残鐘』という句集の命名は長崎の句に由来するものである。

昭和五十一年の五月、「薔薇の坂にきくは浦上の鐘ならずや」の句碑の除幕式出席のため来崎し、その後島原・雲仙にも訪れた。その折、印象的だった島原の武家屋敷通りの中央を清水が流れる様子を詠んだのが次の句である。

走り梅雨水聲町をつらぬける

句碑は、昭和五十二年十二月、島原市、島原馬酔木会、長崎馬酔木会棕櫚によって建立された。

